Osaka University Knowledge Archive

Title	ソール・ベローの小説にみるユダヤ系主人公の社会移動に伴う階級意識の揺らぎ
Author(s)	鈴木, 元子
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33847
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　鈴　木　元　子　）	
論文題名	ソール・ベローの小説にみるユダヤ系主人公の社会移動（ソーシャル・モビリティ）に伴う階級意識の揺らぎ

論文内容の要旨

本研究は，ユダヤ系アメリカ作家ソール・ベロー(Saul Bellow, 1915−2005)の1944年に出版された『宙ぶらりんの男』から，2000年に出版された『ラヴェルスタイン』までの長・中編小説の全14冊を，階級及び階級意識の視座から研究したものである。

題名の「社会移動」の定義は社会学の研究者が使っているものを参考に，内容として，移住・移民，ホロコースト難民の亡命，職業や社会階級の上昇・下降をその意味とする。また「階級」については，マルクス，ウェーバー，ルカーチ，C・W・ミルズ，ポール・ファッセル，デヴィッド・ロスコフ，チャールズ・マレー等による定義を参照した。これまで批評家に注目されてこなかった，ベローの文学作品中の“a series of class concerns” (一連の階級についての関心や懸念)に注意を払いながら，テクストを歴史のなかに戻して考えてみたり，或いは文学的な現象を「ソーシャル・プロセス」(社会過程)として見てみるという方法を取った。先行研究では，「中央」対「周縁」という横に延びた軸から疎外やアウトサイダーといった論評が生まれてきたのに対して，本研究では，社会のピラミッド型ヒエラルキーを表す「階級」という概念によって，すなわち上か下かという縦に伸びた軸により，ベロー文学の読み直しをはかった。

ベローの初期の主人公たちは，小説を執筆中の作者同様に年齢がまだ若く，確固とした職に就いていない者が多かった。けれども，1976年のノーベル賞受賞以後は，主人公たちの職業は一挙に知的エリートや実業家に代替されていった。本論文は，14作品の主人公たちを階級移動と階級意識の観点から5つのタイプに分類して，5章仕立ての構成にした。

第1章「階級意識の揺らぎ」では，階級自体を大きく移動はしていないものの，階級意識の揺らぎを経験する主人公たちについて論考した。『宙ぶらりんの男』のジョウゼフは戦時中のアメリカで，おのれをプチ・ブルと自任していたが，姪には盗人と間違えられ，ルンペンプロレタリアートのヴァナカーやスタイドラーに限りなく近づいている自分に感付いて，米軍に一旦入隊することで精神的苦悩と経済的問題の応急処置とした。『犠牲者』(1947)は，ニューイングランド支配階級の末裔と名乗るカービイ・オールビーと，ニューヨーク・ユダヤ人のエイサ・レヴェンサールとの対立軸で物語は始まる。この階級と人種の差異は，地政学的に異なる都市(大都会，地方小都市，町)の差異によって補強されていた。プロットの進展と共にこの境界線は揺らぎ出し，両者が変容して，関係に折り合いがついていった。『雨の王ヘンダソン』(1959)では，東部オランダ系名家の貴族性に抗うかのように，内的衝迫癖をもつユージン・ヘンダソンがアフリカの奥地へと逃れるが，そこで，現地村落のかつての階級構造の象徴である豚から牛，牛からライオンと接触することで，精神・肉体において向上し，先祖の階級に相応しい医療宣教師になることを決心することで，階級疎外意識を脱するのであった。

第2章「階級の下降」では，次の3作品の主人公たちを取り上げた。アメリカの拝金主義社会に同化して成功した父アドラー博士とは対照的に，同化に困難を覚え愚者ぶりを発揮し続けていたトミー・ウィルヘルム(『この日をつかめ』1956)の方が，ユダヤの精神世界に未だ片足を置いているのではないかと新たな解釈を提示した。また，大学教授を一旦辞職したモーゼズ・ハーツォグ(『ハーツォグ』1964)は妻に逃げられ，研究書も出せずに階級的下降を味わっていたが，成金で大物の兄ウィルのアメリカナイズした言動に，ユダヤの「光」の代わりに「闇」の侵入を見るのだった。彼は精神病院に入院させられそうになりながら，自分はまだ「永遠の側」にいると意識していた。次に，英国インテリからホロコースト難民に下降したアーター・サムラー(『サムラー氏の惑星』1970)は，ニューヨークの階級下落した生活にも慣れ，自称独身僧として同胞のために祈り続けていこうと決断する。この周囲のユダヤ人たちからホロコースト生存者として尊敬されているサムラーを「名誉資本」の資本家と解釈することで，悲観的な結末よりもむしろ肯定的な結末であると読み直しをはかった。これら3人の共通点として，階級を下降したのだから餓死寸前の悲惨さを味わっているのかと思いきや，物質主義社会から身を離すことで自己愛から他者愛へとベクトルが動き，ぎこちない生き方の中にもどこかユダヤらしさを温存しているような温かさを見せる主人公として描かれていることを検証した。

第3章では，「階級上昇を拒否」したオーギー・マーチ(『オーギー・マーチの冒険』1953)と，ベン・クレイダー(『心の痛みで死ぬ人たち』1987)について分析・考察した。オーギーが，階級上昇のチャンスと思しき上流階級の養子縁組話やブルジョア一家の娘との結婚話から逃走したのは自由を守ろうとしたからであるが，その自由とは金儲け主義に取り憑かれない自由でもあった。作者がオーギーを最後までユダヤ人として無垢であらせるために，急激な階級上昇の道を繰り返し迂回させたと理解できる。ユダヤ系移民2世のベンは，「命の木」などのユダヤ古来の思想と，もう戻れない幼少期への郷愁や愛着を，米国で生きるためには土に埋めて捨てなければならないと頭では理解しても，心ではぐずぐずと引きずっていた。現実世界ではこの頃，教育と職業上の飛躍によって，1980年のシカゴのユダヤ人家族の平均所得は一般の平均所得より40％も上回っていた。歴史家たちが口を揃えて主張するのは，両世界大戦間がユダヤ系移民の子どもたちを労働者階級から引き出す「てこ」の働きをしたということである。社会上昇して，アメリカに同化すればするほど，ユダヤ性から遠のいていくと，この狭間で，2つの文化(2つの世界)を生きる2世たちの意識が揺れるのは当然であった。

第4章「階級の上昇と苦悩」で取り上げた『フンボルトの贈り物』(1975)は，有名作家フンボルトの成功・カネ・名声における“Rise & Fall” (成功と没落)を，弟子のチャーリー・シトリーンが数十年遅れで体験するという物語である。ユダヤ系作家にとって，アメリカ社会の功罪が如何なるものかについて吐露されており，シトリーンは結末近くで，「ぼくの富とのロマンスはもう終わった」と語る。もはや成功やカネについて，正体を知ってしまったというところでエンディングを迎えるのである。『ベラローザ・コネクション』(1989) の3人のユダヤ系男性たち(ハリー・フォンスタイン，語り手「わたし」，ビリー・ローズ)は事業を興して成功すると新興成金におさまるが，その過程で人間関係は不通になり，3人の捻れた継承者がラスベガスでイカサマ賭博をしているギルバートであることを悟ると，語り手は人生の終わりに再コネクション(再交流)をはかり，次世代の問題を解決しようと記憶を頼りに記録を書くことを決心する。『盗み』(1989)は，かつて恋人からプレゼントされた指輪を盗まれる話であるが，超富裕層の住むマンハッタンのパーク・アベニューはその同じ街路を北上していくと，ヒスパニック・ハーレムに至る。パーク・アベニューに住む重役のクララに，犯人のイースト・ハーレムに住むハイチ人フレデリックに関する情報がひとつずつ知らされていくのも，ふたりがノベラの最初から最後まで顔を合わせることがないのも，それはこのアメリカの超格差社会を表象しているからであると新解釈を提示した。

第5章「脱階級」の『学生部長の十二月』(1982)では，アルバート・コードとデューイ・スパングラーの出世競争に，ユダヤ人の目指す方向が，社会的地位を得てセレブになることなのか，それとも社会正義を貫いて公共に貢献することなのか，どちらがユダヤ系アメリカ人の進むべき方向なのかが未だ見えてこない現状がそのまま投影されていた。さらに，『アクチュアル』(1997)の主人公ハリー・トレルマンに，ユダヤ性を最小限に抑え，ビジネスでは中庸を以て処し，中国や日本など東洋の影響を受けて文化変容した新たな主人公像を見出すことができた。最後の『ラヴェルスタイン』は，パリで贅沢三昧を楽しむエイブ・ラヴェルスタインの姿を冒頭に置くゴージャスさの前景化から，一般大衆から学者，学者からセレブへと成功した主人公をついにユダヤ人に設定することができたことに注目した。彼は，階級そのものへの懸念よりも，むしろユダヤ嫌悪者や反ユダヤ主義に気をつけるようにと警告を発して死んでいく。

このように，移民2世たちは大学教育によって下層階級から富裕層や知識人，パワー・エリートへと「跳躍」(leap)を遂げたけれども，それが余りにも急激すぎて，形容しがたい歪みや溝，怖れ，不調和など，心理・意識面における不安定さを露呈していた。しかし，たとえば20世紀前半のユダヤ系アメリカ作家マイケル・ゴールドのプロレタリア文学と大きく相違するのは，革命によってすべてが解決するとはソール・ベローは考えていないことである。主人公が社会階級を下降しても，品性やモラルが低下することはなく，むしろ清貧に近づき，公のために使命を担おうとする傾向が、ベロー文学には見られた。これはユダヤ文学の他人に尽くす「義の人」の賞揚，またツェダカー(施し)やミツヴァ(善行)というユダヤ的伝統文化が影響していることの証左である。資本家階級に入れる機会があってもそれを拒み，個別性を失いたくないとする主人公が少なくなかったのも，研究を始める前には予測していなかった新たな知見であった。とりわけ後期の作品では，階級の最上位を目指すことを人生のゴールにするのではなく，ユダヤ的中庸を重んじることや，相違する階級間の対話や交流の様も描かれるようになっていた。加えて，多くの主人公が実は「物書き」で，語りながら書いていたこともあらためて注目すべきポイントであることが判明した。このようなわけで，ソール・ベローは，ユダヤ民族5千年余の歴史にあって，ユダヤ人を一般市民として受け入れた初めての国アメリカで，移民の息子・娘・孫たちが急激な階級上昇を遂げていくその奮闘の歴史の一齣を，換言すると，ユダヤ系アメリカ人たちが同化していく過渡的状況，及びそれに伴う彼らの意識の揺らぎを，即時的，かつ臨場性をもってフィクションに写し出した点に関して，我々はもっと文学的価値を認めるべきであると結ぶものである。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　鈴木　元子　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　教授	片渕　悦久
	副 査	大阪大学　教授	森岡　裕一
	副 査	大阪大学　教授	服部　典之

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：ソール・ベローの小説にみるユダヤ系主人公の社会移動に伴う階級意識の揺らぎ

学位申請者　鈴木　元子

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　片渕　悦久

副査　大阪大学教授　森岡　裕一

副査　大阪大学教授　服部　典之

【論文内容の要旨】

本論文は、２０世紀アメリカ文学を代表するユダヤ系作家ソール・ベローの長・中編小説全１４作品を、「社会移動」、「階級意識」の観点から考察したものである。序論、５章からなる本論、本論の補遺にあたる終章、および結論から構成され、後注と参考文献リストを含め全体で２９７ページ、４００字詰め原稿用紙換算で約９００枚に相当する。

本論文は作品発表の時系列順ではなく、各作品の主人公を社会移動と階級意識の観点から５つのタイプに分類し考察を展開させている。

第１章では、『宙ぶらりんの男』、『犠牲者』、『雨の王ヘンダソン』を取り上げ、階級移動そのもののありようは異なるものの、「階級意識の揺らぎ」という経験を共有する３人の主人公たちがどのように現実を受容していくかについてのプロセスを詳細な読みを通じて解き明かしている。

第２章では、『この日をつかめ』、『ハーツォグ』、『サムラー氏の惑星』が取り上げられ、主人公たちが経験する「階級の下降」を精神的自己回復の契機と解釈し、これら３作品の主人公たちが自己愛から他者愛への心境を変化させる点に肯定的読みの可能性を提示している。

第３章は、『オーギー・マーチの冒険』と『心の痛みで死ぬ人たち』を取り上げ、「階級上昇を拒否」した中心人物に焦点を当てる。とくに、彼らが社会上昇を果たす代償としてユダヤ的共同体を放棄することを迫られ、それを危惧した結果、階級上昇の拒否を選択し、現実世界から一時逃避するという物語展開に２つの文化・世界を生きる移民２世たちの意識の揺れを読み取っている。

第４章では、『フンボルトの贈り物』、『ベラローザ・コネクション』、『盗み』が論じられ、主人公が経験する「階級の上昇と苦悩」が転落の人生へと導く引き金になるという物語が超格差社会アメリカの成功と没落の現実を活写していることを、テクストの詳細な読みにより解明している。

第５章においては、『学生部長の１２月』、『アクチュアル』、『ラヴェルスタイン』というベロー円熟期から晩年の作品が選ばれ、社会上昇を達成した主人公が、その地位を放棄することで精神的気高さを保つ道を選択し、同時にそれが新たな自己確認にもつながることや、社会的成功とユダヤ人としての自己の再認識が「脱階級」ともいえる超越的境地によって表現されることが考察される。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、ユダヤ系アメリカ文学研究、およびソール・ベロー小説研究においてこれまで十分に論じられてこなかった「階級」に焦点を当て、先行研究の問題点を丹念に指摘し、独自の読みを明快に展開させた研究である。従来は「疎外」や「アイデンティティの喪失」など使い古された概念に依拠して考察されてきたベロー小説の物語世界の特質を、「社会移動」や「階級意識」といった社会科学から援用した鍵概念を応用することで、主にユダヤ移民第２世代である作中人物たちのアメリカ人／ユダヤ人としての二重の自己意識と、彼らが目指すアメリカ社会での自己実現のありよう、また自己実現のプロセスと達成にともなう代償をめぐるダイナミックな社会移動の物語として再解釈した点に、本論文の独創性を認めることができる。とりわけ、「階級意識の揺らぎ」を経験する初期作品の主人公たちの行動や心の動きが、「階級」という視座から新たに前景化されて見えてくる周囲の社会的状況との対比によって克明に叙述されている点を明らかにした第１章、および円熟期から晩年にかけてのベローの作家としての自己実現と、ユダヤ系アメリカ人のアメリカ社会への同化の達成および主導権の確立とを重ね合わせた第５章の考察はこれまで論じられることのなかった重要性を帯びており、ベロー研究またユダヤ系アメリカ文学研究に新たな視座を提案した点で評価に値する。

ただし、本論文において問題点がないわけではない。たしかに「階級意識」の定義に柔軟性をもたせ、ジェンダーやエスニシティをも包摂する概念とした点は、作品分析に一貫性を担保するための論述的戦略であったことは十分に理解できる。しかし、そうしたやや強引さを伴う包括的考察が却って鍵概念の拡大解釈を誘発してしまい、流動的な階級意識こそがそもそも移民国家としてのアメリカの現実ではないのかという問題に踏み込まないまま、あたかもユダヤ系アメリカ人の経験が普遍的なアメリカ人の経験であると単純化して結論づけている点については、さらなる考察の深化が求められる。また、２０世紀アメリカ社会に関する統計調査や、実地調査の資料を物語テクストの考察に援用する際に、作品の分析が中断され、記述が脱線する形となり、文学テクストの考察ではなく、啓蒙的なアメリカ文化・社会の入門書になっている印象を与える部分が散見される点についても改善の余地がある。

しかし、これらの点は本論文の本質的価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。